

SHONAN VISION

Social Magazine

Vol.02

2017.11



オリンピックへ、
その後へ、湘南。

Take Free

オリンピックへ、その後へ、湘南。

文・森 休八郎



PHOTO:YUKIO SAWATO

海辺を銀輪で疾走する男がいた。

海を見つめる男がいた。

ふたりの男——大塚靖雄と宍戸幹央がクロスしたとき、新しいムーブメントが生まれた。そしてふたりは走りはじめた。2020年東京五輪へ向けて、その先へ向けて。

サーフィンと、仕事と

大塚は1973年、南米コロンビアで生まれた。商社マンの父親が駐在していたため、帰国後、育ったのは横浜・能見台。

中学・高校時代は水泳部に属し、ひたすら泳ぐ毎日だった。でもサーフィンにも興味津々。板だけで遊べて、シンプルでカッコいい。近所に住む友人がサーフボードを拾ってきて、波乗りに誘われたりもした。しかし、プールで

泳ぐことが青春だった。

東京工業大学理学部に進学した大塚は、

「大学ではサーフィンを、と思っていたんですが、サークルはなし。ただウインドサーフィンのサークルはあったので、そこに入ろうかと……」

とぼんやり考えていた。

ところが、ふとしたはずみで体育会ヨット部に入部する。ウインドサーフィン同好会がヨット部と共同で勧誘活動をしており、その時に「合宿とかやっていて、チームとして盛り上がっているみたいでおもしろそうだな」と感じたのが理由だった。それから卒業まで、週末と長期休暇はヨットに打ち込んだ。三浦半島の森戸海岸や長浜がフィールドだった。「一所懸命練習したし、試合にも出ましたよ」。こう語る大塚は現在、東工大ヨット部OB会の理事事を務めている。

だが、ヨット三昧の日々は学生時代まで。卒業して就

職すると、サーフィンを楽しむようになった。

「会社の独身寮が辻堂にあったんですけど、そこに入れないで、横浜の小机の寮に住んでいました。もし辻堂寮だったら、会社を辞めなかつたかもしれません。だってサーフィンできますからね」

都合5年、サラリーマンとして、システムエンジニアとして奮闘した。が、異業種へ挑戦してみたいとの欲求は抑えがたい。結局2002年、Webデザイナーとして独立を果たした。仕事上のパートナーを得て、「ビーチサイドワークス」を設立、現在に至る。オフィスは当初西鎌倉に構えたが、2010年に七里ガ浜に移転した。大塚本人は、妻の仕事の都合で2年ほど都内暮らしをしたのち、逗子・小坪に居を移す。そしてサーフィンが生活の一部になり、ヨットは年に数回の楽しみになった。

「晴れの日も雨の日も、小坪と七里ガ浜の間を自転車で通ってますよ」

海辺を銀輪で疾走する男——大塚靖雄が、ここにいた。



ひょんなきっかけでセーラーに

宍戸は1976年生まれ。逗子で生まれ、横浜・本郷台で育った。麻布中学・高校時代はサッカーチームに所属し、日々ボールを蹴っていた。1浪のうち東京大学に入学し、工学部物理工学科に進学する。

「大学ではバスケットボールのサークルに入ったんです。ところが浪人時代の友人から『ヨットやろうと思ってるんだけど、一緒に行ってくれないか』と誘われ、それに付き合いました」

ヨットサークルの試乗会を行ったが、それほど興味は持てなかった。が、そのサークルの先輩が港南台や上大岡など、宍戸の生活圏の近くに住んでおり、サークル

との関係はズルズルと続いた。ちなみに宍戸を誘った友人は、結局ヨットを始めることはなかったという。

「結局そんな流れで夏合宿にも参加したんですね」

その場でどういうわけか、全日本選手権への出場を宣言させられてしまう。

「いきなり出られるの？」と驚きましたし、10月の全日本まで、そんなに時間もありませんでしたが、結局出場。でも結果は出ませんでした」

しかも、全日本に出場した以上は、サークルの役職に就かなければならぬという。宍戸は腹をくくった。どうせやるならレースを楽しもう、もっと面白いサークルにしよう。以後宍戸は、ヨットにのめり込んでいくことになる。

一方で宍戸は高校時代から、人間の意識・無意識の世界に关心があった。科学と精神を融合できないか——そんな思いから、東京大学大学院新領域創成科学研究科物質系に進み、修了後は日本IBMに就職した。「IBMに勤めたのは、成熟した組織を知りたい、ITについて知りたい、という思いからでした」という宍戸は、企業の人材育成に关心を抱き、知人のベンチャー企業の創業にかかわる。さらに別の会社の取締役を務めたのちに、自ら「鎌倉マインドフルネス・ラボ」を立ち上げた。ヨットはサークル引退後も続けた。「シードスポーツ」という2人乗りの艇種に乗り続けており、2004年にはJSAFシードスポーツ級全日本選手権で準優勝。チームレース世界選手権に日本代表として出場するほどだ。

現在の住まいは鎌倉。最初は逗子か葉山に住もうと考えたが、山があり、日本の文化があふれる鎌倉を選んだ。暇があれば、海を見に出かける。

「思えば子供の頃から、両親に連れられて鎌倉や逗子の海に来ましたね。海が好きだったんです。海を見ていることそのものも、好きなんです」

海を見つめる男——宍戸幹央が、ここにいた。



クロスしたふたりの男

そんなふたりが出会ったのは、2012年のこと。共通の知人を介したものだった。

大塚は思った。「なんだか共通点が多いな、と。大学で物理を専攻したこと、ヨット経験があること、湘南に住んでいること……」同じことを、宍戸も感じていた。

やがて“疾走する”大塚と、“海を見つめる”宍戸が、材木座でたびたびクロスするようになる。ただの挨拶から始まり、そのうちにかわす言葉も増えていくようになつた。

2015年、転機が訪れた。発端は、突如明らかになった「逗子マリーナ再開発構想」。2020年東京五輪で、江ノ島がセーリング競技の会場に決まったことを受け、逗子マリーナ敷地内に高さ130メートルの高層ホテルを建設する、というのが主な内容だ。近隣の小坪に住む大塚にとって、これは座視できない問題だった。周囲のサーファーたちも当然、反対運動を起こす。署名活動が始まつた。

「ぼくの根っこはセーリング競技だし、今はサーフィンを楽しんでいる。仲間うちでもヨットとサーフィン両方に通じているのは珍しい存在だったと思います」(大塚)

東日本大震災のあと、東北では巨大防潮堤建設が大きな問題になっていた。大塚はSNSなどでさまざまな情報に触れ、自然と自分たちとのあり方を考えることが多くなっていた。

そんなところに降ってわいたのが、地元・小坪の開発計画だった。大塚は次第に、この問題に足を踏み入れていくようになった。

しかし調べれば調べるほど、知れば知るほど、問題が一筋縄ではいかないこともわかつてきた。当時はまだ、自治体にオリンピック関係の窓口はなかった。市町や県、国はどのような連携を取っているのか。それら行政はどんな青写真を描き、どういった意思決定プロセスを経るのか。

憶測だけが広がっていく。ひとくちに「開発」と言っても、誰もが反対するわけではない。賛成を主張したい人だっている。大塚は考えた。

「オリンピックは、小坪だけのことじゃなくて湘南全体の

話なんだ。だから当然、いろんな考え方を持つ人がいる。それならそういう人たちがフラットに集まって、オリンピックについて建設的に意見交換できる場が必要なんじゃないか」

この思いつきを、誰に相談すればいいのだろう。大塚の脳裏にまず浮かんだのが、宍戸だった。

宍戸は当時、「東北の美しい未来を考えるフォーラム」の世話人や「あなたはどう思う？マンモス防潮堤」実行委員会メンバーを務めるなど、防潮堤問題に積極的にかかわり、SNSでも自分の活動を積極的に発信していた。大塚はそれをよく見ていた。だから、宍戸だったのだ。2015年秋のことだった。

江ノリンピック盛り上げ隊、始動



「それなら、カマコンでプレゼントして仲間を集めたらどうでしょう」。相談を受けた宍戸は、大塚にこう答えた。

「カマコン」とは、ITの知識やツールを武器に、鎌倉という街を盛り上げたい人を支援するグループである。何かおもしろいプロジェクトを思いついたら、毎月1度行われる定例ミーティングでプレゼントすることができ、どんどん実現に向けて動いていく。

ふたりはまず、「江ノリンピック盛り上げ隊」を結成した。10月のことだ。

そして11月19日、わずか半月ほどの準備期間のみで、カマコンでのプレゼンに臨んだ。タイトルは「江ノリンピック・ムーブメントby江ノリンピック盛り上げ隊」プロジェクト。100名を超す参加者を前に、大塚は熱弁を振るつた。

プレゼンを叩き台にしたブレーンストーミング。結果的には10名ほどの「隊員」を得た。成功だった。同時に、走り始めた。次はシンポジウムだ。

「プレゼンのあとすぐに準備を始め、なんとか年明けに開催にこぎつけました」(大塚)

「事実も抑える必要があるので、直前に長野オリンピックの跡地視察にも行きました」(宍戸)

そして2016年1月16日、「江ノリンピック・ミーティング vol.1」を鎌倉・円覚寺佛日庵で開催。きたるオリンピックに向けて、自分たちでどのようにオリンピックを盛り上げていくか。また、宿泊施設、交通渋滞、自然環境、文化、ヨットなど様々な課題やテーマについて、約60名の参加者全員がブレスミーティング形式でアイデアを出し合つた。こうして、「盛り上げ隊」はスタートしたのだった。



想いは「2020」を超えて

以後、現在までの間に「江ノリンピック・ミーティング」を計3回開催したほか、「一夜限り『ヨット』スポーツバー～飲みながらヨットレースTV観戦」や「葉山Deクルージング！」、「ロンドン五輪に学ぶゴミゼロ勉強会」といったイベントを次々と仕掛け、湘南全体に認知度と理解を深めていこうとするふたり。大塚は、「2020年のオリンピックを盛り上げるのは、もちろんのことです。でも、それで全部が終わるわけではない。オリンピック後の湘南を、世の中をよりよいものにするために、もっともっと多くの人が関心を持ち、考え、かかわっていくことが必要だと思っています。ぼくたちはこの『盛り上げ隊』の活動を通じて、そんな機会を増やしていきたいと思っています。その意味でこれからは、湘南ビジョン研究所と一緒にやっていけることも多いですね」

一方宍戸は、「ぼくには4つの思いがあるんです」と語る。

「まずはヨット、セーリングというスポーツを盛り上げたい。オリンピックをきっかけに、ヨット文化というものをもっと広げていきたい」

2つ目は、自然との関係だ。

「ヨットは風の力、つまりは自然、クリーンエネルギーで動きます。ヨットをもっと知ることで、ぼくたちは自然とともににあるんだ、ということを実感してほしい、と思っています」

こうした思いは、ヨットを超えて社会とひとのかかわりにまで及ぶ。

そもそも日本人の特性として、一方で住民の意見を取り入れることがあまり機能していない、“お役所仕事”的と言われてしまう行政のありよう、他方でお上のすること

はそのまま受け入れ、再考しないという一種の“美德”を根底に持つ住民側のありようがあるわけだが、「具体的に話が立ち上がり、現実に進行しはじめてから、反対の声を上げたりする。でも本当は、ひとりひとりの問題だったはずなんです。地域のあり方、地域とかかわり方について、ふだんから自分のこととして考えかかわっていれば、一部にあるような単なる反対運動ではなく、もっと前向きで建設的な展開の可能性もあったはず。その意味ではオリンピックは、地域を“自分のこと”として考えるいいきっかけになります。これが3つ目の思いです」

そして4つ目、宍戸の目標は、さらに高みを目指している。

「これからオリンピックの開催までに、海外から多くのひとが湘南、鎌倉を訪れます。その鎌倉を、世界の学びの場にしたいんです」

これまでの経験から宍戸は、最近の海外企業経営は禅文化などの東洋思想がベースになっていることが多い、と感じている。それを日本企業が真似することは、日本がせっかく持っている“資産”を逆輸入しているに過ぎない。

「鎌倉は、禅文化をもっと海外に発信することで、世界に貢献する可能性が大きいんだ、と思っています。それはオリンピックもその後も、続けていくことのはず。ぼくは『ZEN2.0』という、鎌倉初の禅・マインドフルネスの国際フォーラムの発起人のひとりでもあるのですが、それと『江ノリンピック』をつなげていきたい」

ひたすらに前を見つめ、前へと進み続ける大塚と宍戸。その姿は波に乗っていくサーファーの姿、風とともに走るセーラーの姿とダブる。だが波や風と同じく、あくまでの自然体だ。次はどんなアイデアを繰り出してくるのか——興味は尽きない。(文中敬称略)

江ノリンピックムーブメント！HP
<http://enolympic.com/>



2017年11月3日(祝)

江ノリンピック盛り上げ隊と湘南ビジョン研究所にて ”葉山deクルージング企画”を開催!

前日までやきもきさせる予報だったのですが、結局は最高の天気に恵まれた中、参加者38名を乗せた大型クルーザー「ベイクリーズ葉山」は、午後3時50分に葉山マリーナを出航。

プロセイラーで元アメリカズカップニッポンチャレンジ・クルーの伊藝徳雄さんによるナビゲートで、2020年東京オリンピック・セーリング競技の会場となる葉山・逗子沖の海面を、約1時間クルージングしました。

夕日を背にした富士山や江ノ島、そして、思わず見とれてしまう景色を背景にしたヨットレースを観戦できる機会もあり、とても充実した気持ちの良い時間となりました。

クルージング後は葉山港に場所を移し、お話し＆懇親会です。セーリング競技について、伊藝さんの楽しくわかりやすい説明を聞けたほか、2008年北京オリンピックにセーリング競技470級で出場の加原（旧姓：鎌田）奈緒子さん、セーリング競技ナクラ17級で2020年東京オリンピックの出場を目指している川田貴章さんにも加わっていただき、ヨットレースやオリンピックの楽しみ方などをお話しいただきました。

実際にヨットで海に出る醍醐味も大きいですが、ヨットに乗らずとも、“海、自然と共に楽しむ”のもセーリング文化のひとつ。

2020年のオリンピック後も、湘南地域がセーリング、ヨットを通じてつながり、海を共に楽しめる機会を広げるられるような会となりました。

加原さん、川田さんについては以下もご参照ください。

◆2008年北京オリンピック出場時、470級の世界ランキング1位で、吉田（旧姓：近藤）愛選手と共に“コンカマ”ペアとして注目された加原（旧姓：鎌田）奈緒子さん

<https://sports.yahoo.co.jp/column/detail/200807300004-spnavi>

◆東京オリンピック出場を目指す、”梶本／川田組 セーリング競技ナクラ17級”

<https://www.facebook.com/wakatakasailing/>

(文・大塚靖雄)



ブルーフラッグ環境教育プログラム 「うみの環境しらべ隊～由比ヶ浜海岸調査活動～秋編～」に参加

10月28日(土)にNPO法人湘南ビジョン研究所が共催した、「うみの環境しらべ隊」について報告します。

当日は小学生のみんながビーカーとピンセットを持ってプチ科学者に！

プラスチックは材質によって海水に浮かんだり沈んだりすること、紫外線を長期間浴びると粉々に碎けてマイクロプラスチックになってしまうことなど、主催団体であるNPO法人チームぐじら号代表で、海洋研究開発機構(JAMSTEC)海洋生物多様性研究分野シニアスタッフの加藤千明先生や、海洋汚染問題に詳しい東京海洋大学名誉教授の兼廣春之先生と楽しい実験をしながら学びました。

また、鎌倉市環境教育アドバイザーの山田海人先生からは、ビーチコーミングで拾った宝物を見せていただき、鎌倉時代にタイムトリップ！ 700年前、鎌倉武士が乗っていた馬の歯をドキドキして触りました。このプログラムは、最前線で活躍されている学者の方から分かりやすいお話が聞ける素晴らしい機会。来年2月に第2回目を開催予定です。お楽しみに！

(文・片山久美)



第9回 秋の湘南海岸・浜歩き

11月3日(金)、<未来に残したい湘南海岸を考える>をテーマに、「浜歩き」を辻堂海岸で開催しました。

この日は朝方まで天気がぐずついていたのですが、スタートの午前9時にはすっかり回復し、絶好の浜歩き日和に。8回を数える常連の方から、小さなお子さんを含め11名が集合しました。

今回は、トングをバトンにしてリレー形式でビーチクリーンを行う「かながわ海岸150kmビーチクリーン駅伝」を開催中の、湘南クリーンエイド俱楽部とコラボレーション。リレー参加者と一緒に茅ヶ崎方面へ約1キロ、ゴミを拾い歩きました。

湘南海岸は、「渚」「砂浜」「海岸林」3つのエリアに分かれ、中でも辻堂海岸周辺は、その特徴をもつともよく残しています。歩きながら<渚のシギたち><砂浜のチドリたち><海岸林の渡り鳥たち>を探しましたが、残念ながら出会うこととはできませんでした。

また、先日の台風が「砂浜」の海浜植物に大きな影響を与えていましたが、この時期に咲く「ハマニガナ」が、しっかりと黄色い花を咲かせていたのが印象的でした。最後は辻堂海浜公園に移動し、拾い集めた漂着物で「写真立て」を作り、素敵な思い出も作ることができました。

(文・小林秀光)

Information

モーニングビーチクリーン (片瀬西浜)

12.17
Sun

日曜日の朝、お仕事に行く前、お出かけする前の少しの時間、わたし達と一緒にビーチクリーンしませんか。

ビーチクリーン後はコーヒーを飲みながら、海のこと、環境のこと、地元のことをお話しましょう。地元のコーヒースタンドさんの美味しいコーヒーをご用意します。

- ・主催:湘南ビジョン研究所
- ・日時:12月17日(日)7時~8時30分
※雨天の場合は12月24日(日)に延期
- ・場所:片瀬海岸「イルキャンティビーチ」裏、デッキ集合
(小田急江ノ島線「片瀬江ノ島」駅下車、徒歩2分)
- ・参加費:無料
- ・お申し込み:詳細はホームページをご覧ください。
<http://shonan-vision.org>
- ・お問い合わせ:info@shonan-vision.org
(文・ニシオエイコ)



Let's have fun!
配布・設置していただける
場所を募集しています

しづくちゃんチャリティー 「水環境講演会」 零にまつわる雨 水 海のお話し

2018.1.13
Sat

この講演会は、米国での心臓移植を待つ横須賀在住の小学2年生・岡崎零ちゃんを応援するチャリティー講演会です。湘南ビジョン研究所会員で「海の環境保全に関する専門家」でもある壱岐信二さんも「野外科学を仕事にして～湘南を観る～」をテーマに講演します。みんなで水や環境について考えませんか？

- ・主催:一般社団法人横須賀西部水産振興事業団
しづくちゃんを救う会等
- ・日時:2018年1月13日(土)10時~12時
- ・場所:ヴェルクよこすか 6Fホール
(横須賀中央駅より徒歩5分)
- ・お申し込み:しづくちゃんを救う会事務
電話 046-851-5301



**SHONAN
VISION**
Social Magazine

Vol.02
2017.11

PUBLISHER: 片山清宏
EDITOR IN CHIEF: 森休八郎
ART DIRECTOR: 大戸千尋
EDITORIAL STAFF: 小林秀光 ニシオエイコ
片山久美 大塚靖雄
COVER PHOTO: 沢登ユキオ
PHOTO: 芹川明義 佐藤正剛

web <http://shonan-vision.org/>
f [@shonanvision](https://www.facebook.com/shonanvision)
e info@shonan-vision.org